

成果報告書

1. 発表者氏名・発表日時・場所

北原 まり子

2017 年 10 月 22 日（日）8 時～9 時半

オハイオ州立大学（コロンバス市）Sullivant Hall（225 号室）

2. 研究発表を行った催し全体の概要（発表人数、参加人数、参加国・地域の構成など）

米国拠点の二大国際舞踊学会 Society of Dance History Scholars（舞踊史学協会）及び Congress on Research in Dance（舞踊学会）が融合し、Dance Studies Association（舞踊学協会）となったのを記念する大会。舞踊学研究者、アーカイヴ担当者、編集者、ダンス実践者、教育者など、多様な関係者が発表を行った（一般的な研究発表は三名で構成されたパネル形式）。

※申請の際、発表者は Society of Dance History Scholars の会員として登録

発表者人数：約 450 名

その他、発表をせずに参加のみの者もいた（人数不明）

参加国・地域：北米、中南米、アジア諸国、アフリカ諸国、欧州、オセアニア地域など

3. 発表題目・要旨（最終的にペーパーとして発表したもの）

発表題目：「フォーキンが最初にダンカンの踊りをみたのはいつか——歴史的未解決問題の再検討（When did Fokine first see Duncan dancing?: Reexamining a historical problematic）」

要旨：舞踊史においては、1904 年末のイザドラ・ダンカン初訪露の際にミハイル・フォーキンが彼女の踊りをみて、翌年自らのバレエ改革を開始したとされ、フォーキンをダンカンの「追随者」とする考えが支配的である。この考えは、1910 年前後にロシアの批評家スヴェトロフによって、バレエ・リュスに魅了された当時の欧州にも広められ、興行主ディアギレフもそれを広報に利用した。そのためフォーキンは、こうした「追随者」「模倣者」というレッテルをぬぐうため、生涯にわたって自らの改革がダンカンの訪露に先んじていたと主張し続けたが、最初にダンカンの踊りをみた日付は結局明らかにしなかった。フォーキン自身はダンカンの踊りに対して、自らの理想との親近性を感じており、その影響は明らかである。ただし、明確な歴史的根拠のないままに、フォーキン自身の否定する「ダンカン＝改革の引き金」という図式が普及していることは、歴史を上から下へ流れている大河のごとく認識したもので、そこでは、フォーキンが 1905 年の結婚によって振付活動を積極的に行うようになったことや、1909 年のダンカンとバレエ・リュス関係者の密接な交友関係といったものは、ほとんど無視されてきた。本発表では、年代の前後関係のみで語られてきたダンカンの初期の訪露（①1904 年・1905 年、②1907～1908 年）に関して歴史的事実をもとに詳細に検討することで、数度の公演に限られた①では人的交流がほとんどなかったこと（これまでの歴史記述ではこの時に多くの人的交流がなされたとされてきた）、対して②では、自らの学校の再建をかけて、帝室劇場やバレエ学校、ダンサーたちと積極的に交流をはかった

という点で非常に異なる性質のものであったことを明らかにした。また、ダンカンの最初の訪露を 1907 年や 1905 年とする混乱が戦前には根深くあり、そのためフォーキンは自らの改革の発想年を 1930 年代に 1905 年から 1904 年に早めた事実が認められる。舞踊芸術におけるこうした年代や主張の混乱・対立は、とりわけバレエ・リュス解散後の 1930 年代より多くの関係者の自伝や伝記が出されることで、舞踊史の顕著な兆候の一つとなった。今回発表した「フォーキン＝ダンカン問題」は、一つの年代齟齬の問題に過ぎないように見えるが、舞踊史全般を貫くそうした歴史記述の問題を浮かび上がらせているのである。

4. 質疑応答、参加者との討議の内容

「歴史と歴史記述」と題された参加パネルはテーマが非常に多様で、クック諸島の民族舞踊の痕跡を追うアラスカ大学の教授と、黒人音楽のパフォーマンスを革新した R&B グループ「テンプテーションズ」の 1970 年代の活動を分析するカリフォルニア大学の博士後期課程学生と発表を共にした。私の発表に関しては、イザドラ・ダンカンの研究者でダンカン舞踊の継承者の方が、「ダンカンの影響は、特にフォーキンの《レ・シルフィード》で顕著であり、疑い得ない」と踊りを示しつつコメントしてくれた。その返答として、ダンカンの影響があることを認めた上で、ダンカンもフォーキンの作品をみており、ダンカンの秘書がフォーキンに学校の教師にならないかと打診したエピソードもあるため、「例えばフォーキンからダンカンへの影響も完全に否定できないのではないか」とした私の仮定に関しては、否定的な見解が示された。また、発表者全員に対して別の質問者から、ダンスの影響に関わるテクノロジーの問題（交通網の普及等）やツーリズムの問題等についてコメントがあった。私の発表に関しては、20 世紀初頭の目覚ましい技術革新とダンサー間の交流は切り離せないものであり、また、写真技術や映像技術など、テクノロジーによる間接的な影響関係も無視できないものであることを指摘させていただいた。例として、日本のバレエ・リュス受容では、バレエ団自体が来日することはなかったが、写真や挿絵のイメージが大きな役割を果たし、同時代に活発な「受容」がみられた事実を付け加えた。

5. 研究発表以外の訪問先・活動内容（該当者のみ、具体的に記入すること）

訪問先：ニューヨーク公立図書館 パフォーミング・アーツ部門（リンカーンセンター）

活動内容：

- ①1900 年代のミハイル・フォーキンのロシアでの活動の情報を得るため、バレエの舞台評を多く載せていた『ペテルブルク新聞』（マイクロフィルム）を通覧した。
- ②ミハイル・フォーキンが出演および演出している生前に撮影された以下の映像を見た。
 - 『フォーキン——パナデロス・ソロ及びスタジオにて』1927～29 年（16mm フィルム）
 - 『レ・シルフィード』1937 年（16mm フィルム）
 - 『レ・シルフィード』1940-41 年（16mm フィルム）
 - 『シェヘラザード』1937 年（16mm フィルム）
 - 『シェヘラザード』1930 年代（16mm フィルム）
 - 『金鶏』1937 年（16mm フィルム）
 - 『愛の試練』1937 年（16mm フィルム）
 - 『レ・ゼレマン』1937 年（16mm フィルム）

『レ・ゼルフ』1937年（16mm フィルム）

6. 今後の課題、成果発表の展望

現在執筆中の博士論文は、二部構成となっているが、その第一部はフォーキンがどのように歴史的に位置づけられてきたかを問うもので、今回発表させていただいた「ダンカンの影響」の問題、また、初期の活動に関する『ペテルブルク新聞』の記述等を反映させる予定である。第二部は、具体的な舞台演出や動きの問題を扱い、今回見た映像の動きを比較分析する予定である。

今年度中の成果発表としては、発表した学会のプロシーディング集に英語の発表記録を掲載する予定で、また日本語では舞踊学会誌『舞踊學』に「研究発表」として、今回の質疑応答から得た問題も考慮して掲載する予定である。

7. その他、研究発表滞在を通しての感想など

フォーキンの研究は、アメリカでとりわけ活発である。もちろん、フォーキンのロシア時代に焦点をあてた本研究では、ロシアの研究者たち（Vera Krasovskaya, Elizabeth Souritz, Galina Dobrovolskaia, Sergei Laletin）の記述にも多くよったが、活発な議論が展開され、その歴史記述に負うところが多いのは、この振付家が最後の二十余年を過ごしたアメリカである。そのため、本研究に関しては、どうしてもアメリカで発表する必要があった。結果として、ダンカンの舞踊を現在でも継承している方々による、実際の動きを通したフォーキンとダンカンの関係の分析という土壌がしっかり存在することを認識できた。ニューヨーク公立図書館での映像の調査では、稽古着でのリハーサル映像のものと、衣裳付きの舞台映像のものがあり、その印象の違いから、純粋なフォーキンの振付と実際の舞台での見え方について考察するきっかけとなった。また、著作権管理をしているフォーキン・エステート・アーカイヴの許可を得て、フォーキン自身が踊る姿を映した稀な映像も見ることができた。

今回の研究発表と資料調査を可能にしてくれた、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点若手研究者海外派遣事業に大変感謝している。